やさしい
川崎の地名

上

（川崎区・幸区・中原区・高津区）

川 崎 市

日本地名研究所 編

まえがき

この小冊子は、さきに川崎市が発行した「川崎の町名」や「川崎地名辞典」をもとにして、川崎の地名をやさしくまとめたものです。各地名について場所や由来をわかりやすく説明するとともにエピソードも盛り込んでいます。

今回は、川崎区・幸区・中原区。高津区の４区を発刊し、宮前区・多摩区・麻生区の 3 区については、今後発刊する予定です。

ここに取り上げた地名は、各区の地名の全部を載せているわけではありませんが、由来の面白そうなものをとりあげました。

小中学校の皆さんは、この「やさしい　川崎の地名」を使って、学校の自由研究や宿題に役立てて下さい。そして、さらに詳しいことを知りたい時は、溝口の「てくのかわさき」４階の「川崎市教育委員会　地名資料室」に「川崎の町名」「川崎地名辞典」などの資料があり、利用ができます。

地名を知り、自分の町を理解することを目指して、この冊子が有効に使われますことを祈っています。

平成２２年３月

編集　　日本地名研究所

発行　　川崎市

目　　次

まえがき
川崎市のなりたち……3
川崎区……4
川崎区のなりたち……5
1 川崎(かわさき)……6
2 砂子(いさご)……7
3 宮前町(みやまえちょう)……8
4 大島(おおしま)……9
5 桜本(さくらもと)……10
6 夜光(やこう)……11
7 渡田(わたりだ)……12
8 小田(おだ)……13
9 川中島(かわなかじま)……14
10 浅田(あさだ)……15
11 藤崎(ふじさき)……16
幸　区……17
幸区のなりたち……18
12 小向(こむかい)……19
13 戸手(とで)……20
14 古市場(ふるいちば)……21
15 塚越(つかごし)……22
16 鹿島田(かしまだ)……23
17 下平間(しもひらま)……24
中原区……25
中原区のなりたち……26
18 上丸子(かみまるこ)……27
19 小杉(こすぎ)……28
20 等々力(とどろき)……29
21 宮内(みやうち)……30
22 苅宿(かりやど)……31
23 今井(いまい)……32
24 井田(いだ)……33
25 木月(きづき)……34
高津区……35
高津区のなりたち……36
26 高津(たかつ)……37
27 溝口(みぞのくち)……38
28 二子(ふたご)……39
29 末長(すえなが)……40
30 千年(ちとせ)……41
31 子母口(しぼくち)……42
32 向ヶ丘(むかいがおか)……43
33 久地(くじ)……44

川崎市のなりたち

川崎は多摩川の河口近く、多摩川のつくった三角洲（さんかくす＝デルタ）の上にできた町です。川崎の「川」は多摩川を指し、「崎」はデルタを意味します。「川崎」という地名の成り立ちは地形の状況からでたものです。現在はこの市域が拡大し、多摩川の沖積(ちゅうせき)低地と、多摩丘陵から成り立っています。

川崎の名が歴史にあらわれるのは平安後期からです。秩父平氏(ちちぶへいし)の出身である「河崎冠者基家」(かわさきのかじゃもといえ) がこの地を開拓したと伝えられています。鎌倉初期、勝福寺鐘銘（しょうふくじしょうめい）に「河崎庄」の刻みが見られます。古代から中世(鎌倉・室町時代)には、河崎の表記が用いられたようです。

古代から近世(江戸時代)まで、市域の地は武蔵国橘樹郡（むさしのくにたちばなぐん）に属しました。北部の柿生地区の村は都筑郡（つづきぐん）に属しました。

江戸時代、川崎は東海道の宿場として賑わいました。市域には、橘樹郡川崎領の村が 21 村、橘樹郡稲毛領(たちばなぐんいなげりょう)の村が 52 村、都筑郡小机領(つづきぐんこづくえりょう)の村が 11 村、全部で 84 村ありました。

明治維新以後、この様子は大きく変わりました。明治 22 年、市制・町村制がしかれて、これらの村の統合が進められ、村の数は 15 になりました。
明治 45 年東京府と神奈川県の境が変更され、多摩川北からこちら側に移された村（飛び地など）により 9 村増え、24 村となりました。

大正 13 年、川崎町・大師町・御幸村が合併して、川崎市が誕生しました。その後、市は市域を拡大し、昭和 9 年・12 年・13 年・14 年と、現在の中部・北部の村を編入し、太平洋戦争が始まる頃には概ね現在の形になりました。

昭和 47 年に政令指定都市になり、川崎区・幸区・中原区・高津区・多摩区の 5 つの区がおかれました。その後、北部地域の住宅・人口の急激な増加により、昭和 57 年に高津区から宮前区が、多摩区から麻生区が分区して 7 区となり、併せて町名も増えました。